



ホームステイの夜のお供はラオラオ。45度を越すラオスの米焼酎をストレートで回しのみ。これが唯一の男たちとの交流の場だった。これが、翌日の気温40度近い森歩きの体力減退に影響しないわけはなかったが、一晩限りのホームステイは記憶喪失で朝となった。

ボルネオの熱帯雨林が油やしのプランテーション開発のために消失しているが、この地ではゴムのプランテーションのためにラタンなどの自然林が消失している。村のラタン製品サークルの女性たちと現場視察に行ったが、ラタンの植林もエコツアーとして考えるべきだろう。



藍染の坪や機織り機が各家の軒先に見えるのがラハナム村。中心地のかなり立派な寺院があり、村の信心深さと経済力を計り知ることができる。プライドを持った作家たちは、自分の作品を自信を持って勧めるが、押し売りに感じないのがうれしい。



南部の中心都市サハンナケートにはビエンチャン同様多くの西洋人が滞在していた。洒落たセンスのカフェアナコットでは店主の林さんが迎えてくれた。日本人にも好まれる味付けで、尚且つ、JICAの一村一品運動の商品 ホワイトアスパラに似たラタンスティック(?)も出てきた。店内にはラオス産の手作り製品が展示販売されている。ラオスの旅全般を通じていえることだが、ラオス通貨 100 キープが約 1 円、3 万キープ (約 300 円) で手作りコットンスカーフが買えるので、日本の物価の感覚ではかなりお得だ。経済特区として発展しているこの都市は、メコン川の夕陽も売り物にして、日の出の勢いを感じる。



時代に取り残されたラオスの「売り」は「優しい自然と穏やかな人々」だったが、近隣諸国の急速な経済発展はラオスだけを静かに見守ってはくれないだろう。事実、急速に近代化が進み、都市の人々の心はかなり慌しくなっている。今回、訪ねた村々の人々は未だにラオスらしさを感じさせてくれたが、無理のない成長を祈っている。